

目次

繁長の生涯を辿るにあたって	1
青竜編（少年期）	
県北の拠点村上を築いた繁長	2
繁長、波乱万丈の幕開け	3
繁長、耕雲寺で亡き父の無念を晴らす	5
番外編 耕雲寺で十三歳の繁長を再現	6
朱雀編（青年期）	
繁長、景虎に従い関東・越中へ転戦	8
激突、八幡原の戦い（第四次川中島）	9
戦いの果てに…繁長、苦悩の日々	11
斬るか斬られるか…藤景の悲劇	12
繁長の乱、若き武将の意地と誇り	13
繁長絶体絶命、上杉軍に包囲され…	15
繁長、守りきった誇りとその代償	16
白虎編（壮年期）	
巨星墜つ、繁長に訪れる転機	19
揺れる越後、御館の乱勃発	20
繁長、再び歴史の表舞台へ	21
揚北の猛将、新発田重家の乱	23
敵陣突入、重家の壮絶な最期	24

めざすは庄内、武藤家再興
緻密な戦略、大浦城の戦い
決戦、朝もやの十五里原
繁長と羽黒神社の深い関係

30 29 27 26

玄武編（老年期）

繁長の数奇な運命、故郷との訣別
巨大化する豊臣支配体制の脅威
戦国末期、渦中の上杉氏と繁長の復権
豊臣体制の崩壊、景勝の家康迎撃作戦
強大な上杉包囲網、迫りくる徳川軍
無念、宿敵家康は関ヶ原へ
兼統の誤算、長谷堂城泥沼の戦い
風前の灯、攻め寄せる政宗軍二万
若き勇将本庄充長、決死の出撃
松川の壮絶な戦い、相次ぐ討ち死
大軍を退けた繁長の奇策とは
福島城戦、語り継がれる智略と勇氣
繁長、上杉の使者として上洛
上杉家を救った繁長の武勇
繁長を支えた二十一人の子供たち
人々の心の中に生き続ける繁長

32 33 35 36 38 39 41 42 44 45 47 49 50 52 53 55

【考察】繁長はなぜ強かったか？
あとがき

57 59

繁長の生涯を辿るにあたって

「禍福は糾える縄の如し」「人間万事、塞翁が馬」という諺がある。平たく言えば、いずれも良いことと悪いことは背中合わせであるということのようである。私はこれを、順調な時もそれに驕れるな、不調な時も諦めるなど、拡大解釈することにしていく。みなさんご自身がこれまで歩んできた道を振り返ってみると良くお分かりになると思うが、思い当たることが多いのではないだろうか。私自身も、そんな意味で、本庄繁長の人生をたどりながら、これまでの自らの人生を振り返り、準え（なぞらえ）たりして、感慨に耽る時間を過ごせたことを感謝している。それにしても、繁長の場合は実に波瀾万丈で、前述の諺を自ら示してくれているようであるが、運命に流されることなく、幾多の困難を果敢に乗り越えているのが実にたくましい。そして、七十五年の生涯を力強く生き抜き、暈の上で静かにその天命を全うしたという点で大変魅力的であり、現代人をも勇気づけてくれる。それが四百年後の今でも熱狂的なファンが多い所以（ゆえん）であろうと思う。

繁長については、私自身、何十年も村上大祭の“荒馬”（十九台の山車の先導役、庄内出兵勝利の凱旋風景がモチーフ）に声援を送りながら崇拜してきたものの、失礼なことにその一生を良く知らなかったというのが正直なところである。今となっては只ただ反省するのみである。調べてみると、その墓は福島市の長楽寺にあるという、そして、毎年九月十五日に供養を行っているということであった（命日は十二月二十日であるが、供養は八幡神社の祭礼の日に行っている）。繁長が夢枕に立ったとか、そんなオカルトめいた話ではないが、何かに導かれるように、その墓にお参りしたくなり、その供養の際にだけ御開帳される繁長像（木像）にも会いたくなった。その結果…、平成二四年九月十五日、秋晴れのなか福島市まで車を走らせることとなり、念願の繁長さんに面会？することができた。ようやく心は晴れたのだが、次に生じたのは、（福島城代ではあったもの）村上ゆかりの武将の墓を、今も大切に護り継いでくれていることへの頭が下がる想いであった。住職さんのお話によれば、ほとんどの寺が焼けた福島大火（明治一四年、約千八百戸焼失）でも焼失を免れ（堀があったため）、平成二三年の東日本大震災でも本堂が壊滅的な被害を受けたにも拘わらず、ご住職、檀家の方のご努力により、復旧を終えたとのことだった。その話を聞いた時、多くの困難を乗り越えた繁長の一生と重なる想いだっただけで、もちろん、長楽寺の関係者の方々のご苦勞があったからこそなのだが、繁長の魂もその一部始終を天から見守っていたかのように思えた。そして、ご住職との話のなかで、翌、平成二五年九月十五日にその四百回供養を予定していることを伺った。今から思えば、これが繁長の魂に憑りつかれ、この長い物語をすることとなった発端である。